

今村知商と吉田光由の「或師」について^[1]

「円」と「一」への憧憬

島野達雄

2017.3.2

今村知商(1591-1668)^[2]が著した『豎亥録』(1639)の序文、および吉田光由(1598-1673)^[3]の寛永 8 年(1631)版『塵劫記』の跋文には、「或師」が彼らを指導した、と記されている。『豎亥録』と『塵劫記』にみえる或師の言説とイエズス会士のジョアン・ロドリゲス(1561?-1634?)の言説を比較してみたい。

1. イエズス会の布教戦略

中国におけるイエズス会すなわちマテオ・リッチ(利瑪竇)の中国での布教戦略は、クラビウスなどの著作を中国の伝統科学に包んで伝える、現地適応主義とも言うべきもので、儒教をも宗教とみなさず東洋文化の一つとした。これにより中国の士大夫階級に支援者・理解者を獲得した。そもそも、イエズス会士が和名や漢名を名乗ったこと自体が、この現地適応主義を示している。

たとえば、『坤輿万国全図』(1602)の序文は、「地と海は、もともとこれ円形にして合して一球をなす。天球の中に居すこと、誠に鶏子の黄の青(*精)の内に在るがごとし。地の方を為すと謂うこと有るは、乃ち其の定まりて移らざる性を語る。其の形体を語るに非ざるなり」と、中国古来の「渾天説」を利用して「地球(地円)説」をのべ、周髀算経以来の「天円地方説」をやんわりとたしなめている。

慶長 11 年(1606)6 月に京都二条の南蛮寺を訪ね、不干斎ハビアンらと論争した林羅山は、朱子の渾天説「天は円にして動きて地の外を包み、地は方にして静かに天の中に処す。故に天の形半ばは地上を覆い、半ばは地下を繞る」(『論語或問』為政第二)を知っていたが、このイエズス会の渾天説は知らなかったようだ。[付録 1「林羅山『排耶蘇』の地球説に関する問答」参照]

また漢訳洋書の『幾何原本』(1607)、『同文算指』(1614)、『測量法義』(1617)の徐光啓や李子藻の序文には、「堯や舜の時代に暦が生まれた」「数は六芸の一」「西洋の法は周髀算経や九章算術と異ならない」といった記述があり、のちの梅文鼎による西学中源説の素地となっている。

^[1] 2014 年 11 月 16 日同志社大学で開かれた第 21 回数学史研究発表会(第 243 回近畿和算ゼミナールを兼ねる)で発表した「今村知商の「或師」について」を改訂増補した。この論考は 2012 年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励の支援を受けた成果物の一つである。

^[2] 今村知商の生没年は、野口泰助ほか著『今村仁兵衛知商と内藤政樹』による。

^[3] 吉田光由の没年月日寛文 12 年 11 月 21 日は西暦 1673 年 1 月 8 日。

2. ジョアン・ロドリゲスの思想

日本でも現地適応主義は採用され、日本語、中国語に堪能であったジョアン・ロドリゲス（寿庵、陸若漢）は、著書『日本語文典』『日本語小文典』『日本教会史』に見られるように、日本語や日本の風習を詳細に研究していた。むろん、『日本教会史』第二巻第八章にあるように「日本人はシナから文字や学問その他多くの文化的慣習を受け入れたように、またシナにある多くの学芸や技芸、特に算術、幾何学、音楽および天文学からなる数学的学芸をも受け入れた」ことを認識していた。

さらに、ロドリゲスは、同じ第八章で、中国学芸のバビロニア起源説をとらえ（『日本語文典』にも記載）、伏羲・神農・黄帝の三人の賢者の時代に、「太陽年を四季をともなつた三六五日と四分の一日に区分」している（すなわち四分暦の）書物を「世界最初の書物であり、時代的に最古の書物であるかも知れない」とし、中国の天文観測を「世界で最も古い観測」と断言し、黄帝が五色・文字・学校・五声・算術・医術・度量衡・輸送や養蚕・器をつくる技術、の九つの事跡を創設した、としている。また、「それらの学芸が用いられたのは、われわれの間におけるよりはるかに昔のことである」と年代的にも古いとしている。

ロドリゲスは、中国を本山とする、ある種の「中華思想」の持ち主であったと言えるだろう。そのせいか、『日本教会史』はイエズス会の承認を得られず、未刊行のまま草稿だけが残った。

3. 今村知商の「或師」の「円」と「一」

河内狛庄出身の今村知商『豎亥録』（1639）の序文は、「はじめに京都の毛利重能に学んだが、「円」を理解することはできなかった」と、次のように述べる。

予、僕幼にして算術にこころざし、諸書を閲し、術をおこなうといえども、ことごとくは解するあたわざるなり。ここに一日、花洛（＝京都）毛利氏重能、明算の学士なるをつたえきき、たずねゆきて、予の茅塞（ぼうそく）をはく。重能いわく、算術をつくらんと欲せば、まさに実と法を紀置し、因術、帰術、あるいは増減の術、あるいは方弦の術を勘考すべし。しこうして化せばすなわち商を知得す。いわゆる方弦の術はすなわち鉤股弦。これ規なり。予、これにもとづき、数術をなすといえども、方をなすを知りて、いまだ円をなすを知らず。いやしくも宇宙の洪荒、まさに度数あり。よりにて小学をなすといえども、またこの術をあきらかにせざるべからず。ここにおいて、嘆をいだきて、歳月をふること久し。

而して**或師**に問う。師曰く、それ算数の濫觴は、伏羲はじめて八卦を画し、黄帝三数をさだめて十等となし、隸首よりてもって九章をあらわす。ゆえに八卦九章は、万物の本。これ一なり。ああ、いかんぞ一の根元をしるとなさんや。予これを聞き、かえりみて質の鈍をもつて鑽研をとげ、円弦の術をもつてすなわち径矢弦、弧矢弦となづく。これ矩なり。規矩なきは何をもつて模倣せん。しかりしこうして規矩は算術の法元なり、また事物の靈枢なり。（原漢文）

非常に意味のとりにくい文章だが、「或師」が伏羲・黄帝・隸首の事跡を高く評価し、八卦九章を「万物の本」，「一」ないし「一の根元」とみなしていることはわかる^[4]。この或師に出会ったことで、今村知商は「円」が理解できたようだ。

なお、『夏侯陽算経』原序に「(算数起自伏羲) 而黄帝定三数为十等，隸首因以著九章」とあり、「或師」の言葉と同じ文章になっている。

三数は、十万を億，十億を兆，十兆を京とする「下数」，万万を億，万万億を兆，万万兆を京とする「中数」，万万を億，億億を兆，兆兆を京とする「上数」の三つの命数法を指す。十等は、億兆京垓姉壤澗正載の十の名称のこと。

『五経算術』の「尚書孝経兆民注数越次法」に三数と十等の説明がある。

4. 嶋田貞継『九数算法』の「一」

三上義夫によれば、嶋田貞継の妹婿が今村知商の弟子の安藤有益。安藤有益『豎亥録仮名抄』に今村知商は序文を寄せており、嶋田貞継は妹婿の安藤有益はもちろん今村知商とも面識があったと思われる。嶋田貞継『九数算法』自序の冒頭部分を示す。

天地の萬物を化するや、廓然として窮り無しと雖も、陰陽の度、日月寒暑晝夜の変、理(おさめ)ずんばあるべからず。其れ之を知るは、未だ肯て数を逃るること能わず。先儒の所謂理の始まるどころ、数の起こるところ、微なるかな、微なるかな、其の小、形無く、昭なるかな昭なるかな、其の大、限り無し。是を以て所謂其の用、廣大にして外無く、其の体、微密にして見ること難きのみ。而も其の合散する所以は、悉く一に帰す。一は理なり。未だ発せざる則(とき)んば、萬殊の根本。発する則んば、萬殊の各具なり。苟も其の一を理会する則んば、物として到らざること無く、事として応ぜざること無し。然れども其の極、淵奥にして浅知のよく及ぶところにあらざる所以なり。(原漢文)

この序文も意味がとりにくいだが、理と数が合散するわけは「一」に帰す、宇宙や万物の根本である、といったことを述べていると思われる。

5. 吉田光由の「或師」と『算法統宗』

吉田光由『塵劫記』寛永8年(1631)版の跋文にも「或師」が登場する。

算数の代におけるや、誠に得がたく、捨てがたきは、この道なり。しかれども代々この道おとろえて、世に名ある者少なし。しかあるに、我まれに或師につきて、汝思の書をうけて、これを服飾とし、領袖として、その一二を得たり。その師に聞けるところのもの、書き集めて十八巻となして、その一二三を上中下として、我におろかなる人の初門として伝えり。…愚のつたなきも、此外十五の巻あり。いわんや世に名ある人をや。(漢字かなまじり文)

この或師は、吉田光由に汝思(程大位の号)の書すなわち『算法統宗』を与え、あわせて十八巻に相当する知識を授けている。光由は、この最初の三巻分が『塵劫記』である、

[4] 『淮南子』詮言訓に「一は万物の本なり。敵無きの道なり」とある。

と述べている。

なお、嶋田貞継の『九数算法附録』には、『算法統宗』からの引用がある。

6. 吉田宗恂の「円」と光由の法名

角倉了以の弟（すなわち素庵の叔父）であり、徳川家康の侍医となった、吉田宗恂の『歴代名医伝略』（無刊記本）の孫思邈条には、地球（地円）説を述べていると思われる一節がある。

仁は静なり。地の象、故に方たらんことを欲す。伝（春秋左氏伝・昭公三十一年）に曰く、「利回（利のために邪）を為さず、義疚（義のためにやましいこと）を為さず」と。方の謂なり。

智は動ず。天地の象、故に円なることを欲す。易（易経・繫辞下）に曰く、「機を見て作す。終日を俟（ま）たず」と。円の謂なり。（原漢文）

この一節は、『旧唐書』にもとづくもので、原文では仁＝静＝地＝方に対する、智＝動＝天＝円という対句構造を持っている。すなわち「天地の象、故に円なることを欲す」の「地」は衍字（えんじ＝余分な字）となっている⁵⁾。全5万字の『歴代名医伝略』のうち衍字はこの1字だけであり、吉田宗恂は意図的に「天地の象、故に円なることを欲す」と述べたと考えられる。[付録2「『歴代名医伝略』諸版の異同一覧」参照]

なお、吉田光由の法名「顕機円哲」のうち「顕（見）」「機」「円」の3字までが、この一節に含まれている。

7. 角倉源流系図稿とロドリゲス

「角倉源流系図稿」には、吉田光由が、今村知商と同じように、初め毛利重能に学び、そのあと素庵から『算法統宗』を習ったという記述がある。

光由、弱年より算学に志す。はじめ毛利勘兵衛重能にしたがって学ぶ。しかれども、九章の法全からず。のちに吉田素庵に親炙して、新安の汝思の算法を習う。而して後、九章の法、既に通曉す。故に寛永四年、童蒙に便にせんと欲して、和字算法の書十八巻を編集す。書成って、題号を天竜寺の長老、玄光に求む。玄光、これに名づけて塵劫記という。あわせてこれに序していわく、けだし塵劫の来ること絲毫も隔てずの句に本づくという。全書十八巻のうち、日用急務に助るものを取りて三巻とし、分ちて上中下を一部となし、梓に鏤む。（原漢文）

林屋辰三郎『角倉了以とその子』所引の「儒学教授兼両河転運使吉田子元状」（1633）に「1606年から1609年に家康の命令で素庵が甲豆総を巡視」している最中の、1607年にロドリゲスも「家康の招きで伊豆の銀山を視察」（日本切支丹宗門史上巻）しており、両者に面識があったと考えられる。

⁵⁾ 『近思録』巻二に「孫思邈曰、膽欲大而心欲小。智欲圓而行欲方。可以爲法矣」とある。

8. 今村知商・嶋田貞継とロドリゲス

江戸期では最古とされる暦学書、今村知商の『日月会合算法』、および嶋田貞継『九数算法』の方程第八は、「三歳一閏則三十二日九百四十分日之六百単一。五歳再閏則五十四日九百四十分日之三百七十五」などとする宋・蔡沈の『書集伝』に「算注」を付加したもの。

ロドリゲスも『日本教会史』第二卷第八章で、「すなわち、太陽年は太陰年より十一日多いので、三年ごとに一つの閏年を置き、その年は一月を加えて一年を十三か月とし、さらに五年ごとに二つの閏年を置き、十九年の〔太陽の〕獣帯周行を経ると、十九年に七つの置閏を行なって、再び同じ状態にもどるからである」と述べている⁶⁾。

今村知商や嶋田貞継が重要視した「円」や「一」に関して、ロドリゲスは、『日本教会史』第二卷第九章に、「世界が唯一であるという信仰と世界が示している自然の理法とに従って、われわれは世界が単一であると考えているが、このことと天地が円形であることについて〔つぎに述べよう〕。世界の単一性とその形態に関しては、古代の哲学者の間でさまざまな意見があったように、ここ〔シナ〕でも諸学派の哲学者の間でいろいろな意見がある」としている。

『日本教会史』はマカオ滞在中の1620年から1627年に執筆された。すなわち、ロドリゲスは蔡沈『書集伝』を今村知商や嶋田貞継よりも先に読み、世界の「単一性」と「円」について、今村知商や嶋田貞継より先に論じている。

9. まとめ

吉田光由は「或師」に『算法統宗』をもらい、その「或師」から多くのことを学び、法名には「円」の字が取り入れられた。

今村知商は、「或師」に会うまで、「円」を理解することができなかった。

吉田光由や今村知商などの江戸初期の和算家たちには、「円」という言葉に、特別な思い入れがあったのではないだろうか。

ポルトガルからはるばる来日したロドリゲスが地球（地円）説を体得していたことは言うまでもない。

さらに、今村知商は、「或師」が「一の根元をどうすれば理解できるだろうか」と苦悩した、と述べている。この「一の根元」こそ、イエズス会士・ロドリゲスにとっての「神」ではなかっただろうか。

慶長15年(1610)、ロドリゲスは家康の命でマカオに追放された。

そのとき、今村知商は20歳、吉田光由は14歳だった。

⁶⁾ 三歳一閏は9年に3回閏月、五歳再閏は10年に4回閏月、すなわち19年に7回閏月を置くことをいう。なお、「五歳再閏」の語は、易・繫辭上、周礼注疏、旧唐書、金史に見えるが、「三歳一閏」の語はこれらに見えない。「三歳一閏」は、漢書律曆志に「三歳一閏、六歳二閏、九歳三閏、十一歳四閏、十四歳五閏、十七歳六閏、十九歳七閏」とある。両方があるのは、書集伝のほかは、宋・邵雍の皇極經世書・觀物外篇下の「一歳之閏六陰六陽三年三十六日故三年一閏五年六十日故五年再閏」、礼記注疏・王制の「因天道三歳一閏、天道小備五歳再閏、天道大備故五年一巡」などがあるが、これらは十九年七閏には触れていない。

以上から、「ロドリゲスが日本滞在中にかれらを指導した」と考えても、大きな矛盾は起きない。

平山諦が比定した、来日して日の浅いカルロ・スピノラよりも、中国語・日本語に堪能であった、ジョアン・ロドリゲスこそ「和算の誕生」に立ち会った人物ではないだろうか。

この小論のねらいは、キリシタンの時代の、歴史や科学思想を論じるとき、和算書が突破口になる可能性をもつことを明らかにすることにある。いままで、今村知商や嶋田貞継、さらには吉田光由が書いた序文を「思想」として読んだ人は、いないのでないだろうか。

今後の課題として、『天学初函』理篇や『どちりいなきりしたん』『妙貞問答』などのキリシタン書および反キリシタン書、吉田宗恂の医書、角倉素庵の手になる嵯峨本の『史記』『文章達徳録』などと、江戸初期和算書を比較してみたい。

【参考文献】

- 『塵劫記』寛永8年版 早稲田大学
- 『豎亥録』東北大学林文庫
- 『日月会合算法』東北大学林文庫
- 『書集伝』出雲寺万次郎版 大阪府立図書館
- 『書経大全』林羅山訓点 吉文字屋庄右衛門版 大阪府立図書館
- 『歴代名医伝略』A 無刊記本 B 元和3年本・杏雨書屋 C 寛永3年本・国会図書館 D 寛永9年本・上田市立図書館花月文庫
- 『羅山文集』羅山先生全集 寛文2年刊 大阪府立図書館
- 『坤輿万国全図』京都大学電子図書館
- 『幾何原本』『同文算指』『測量法義』『夏侯陽算経』『五経算術』 文淵閣四庫全書
- 『日本教会史』土井忠生ほか訳 大航海時代叢書IX・X巻
- 『日本大文典』土井忠生訳 三省堂
- 『日本語小文典』池上岑夫訳 岩波文庫
- 『九数算法』佐藤健一校注 江戸初期和算選書第6巻
- 『九数算法附録』藤井康生校注 江戸初期和算選書第7巻
- 『日本切支丹宗門史』レオン・パジェス 吉田小五郎訳
- 林屋辰三郎『角倉了以とその子』星野書店
- 平山諦『和算の誕生』恒星社厚生閣
- 野口泰助・加藤芳信・川瀬正臣共著『今村仁兵衛知商と内藤政樹』
- 安大玉『明末西洋科学東伝史—『天学初函』器編の研究—』知泉書館
- 桐藤薫『天主教の原像—明末清初期中国天主教研究—』かんよう出版
- 島野達雄「ロドリゲスの思想について」 近畿和算ゼミナール第51回 1997.4.6
- 同「今村知商の「或師」について」 同第55回 1997.9.14
- 同「校注・今村知商『日月会合算法』」 同第87回 2000.7.9
- 同「『歴代名医伝略』(2)吉田宗恂の地球説と江戸初期和算家の「円」概念」 同第242回 2014.10.12

【付録 1】林羅山『排耶蘇』の地球説に関する問答

(日本思想体系 25 『キリシタン書・排耶蘇』より)

慶長丙午六月十有五日。道春及び信澄（*道春の弟）、頌遊（*松永貞徳）が价によりて、意はざるに耶蘇会者不干氏（*不干斎ハビアン）がもとに到る。不干、守長（不干が侍者）をして三人を招き室に入る。かの徒席に満つ。坐定まり、寒温をはつてのち、春問ふに徒斯（デイス）画像の事を以てし、彼をしてこれを言はしむ。対語鶻突。けだし浅近を恐れてこれを言はず。またかの円模の地図を見る。

春曰く、上下あることなしや。

干曰く、地中を以て下となす。地上亦天たり。地下亦天たり。吾邦舟を以て大洋に運漕す。東極これ西。西極これ東。ここを以て地の円なるを知る。

春曰く、この理不可なり。地下あに天あらんや。万物を觀るに皆上下あり。彼の上下なしと言ふが如きは、これ理を知らざるなり。かつそれ大洋の中、風あり波あり。舟西してあるいは北、あるいは南してまた東。舟中の人、その方を知らず。おもへらく西に行くと。これを西極これ東と謂ふは不可なり。もし舟東すれば、すなはちあるいは北、あるいは南すれば、またかならず西す。これを東極これ西と謂ふは不可なり。かつまたついに物みな上下あるの理を知らず。彼、地中を以て下となし、地形を円かなりとなす。その惑ひ、あに悲しからずや。朱子のいわゆる天半地下を繞る（*朱熹『論語或問』為政第二に「天は円にして動きて地の外を包み、地は方にして静かに天の中に処す。故に天の形半ばは地上を覆い、半ばは地下を繞る」とある）。彼これを知らず。

...

耶蘇会者曰く、地下もまた天なり。もし地を掘り底に到りて、これに臨み、これを見るときんば、かならず天を視ること井に鑑るが如きなり。ここにおいて石を落とすときんば、石、地の中間にありて上ならず下ならず。これすなはち、地、天の中間にあるの証驗なり。余（*羅山）曰く、我天地の間を觀るに一物として上下あらざるはなし。彼、中を以て下となす。何ぞ物に各上下あるの理を知るに足らんや。もし人ありて、隕る石何れの処に止まると問はば、必ず落つるところに落つと曰はんのみ。何ぞ上ならず、下ならざること之あらん。

耶蘇者曰く、天は円なり、地もまた円なり。

余（羅山）謂（おもえ）らく、動あり、静あり、方円あり。物みなしかり。天地を甚しとなす。動く者は円に、静かなる者は方なり。その理かくの如し。もし彼の言の如くんば、すなはち何ぞ方円と動静とあらんや。しかりといへども黙して識り心に通ずる者にあらんば言ひ易からざるなり。

【付録 2】『歴代名医伝略』諸版の異同一覧

吉田宗恂『歴代名医伝略』は、大別して、A 無刊記活字本、B 元和 3 年活字本、C 寛永 3 年活字本、D 寛永 9 年整版本の 4 種が刊行されている。

『歴代名医伝略』の ABCD4 本の文字の異同パターンを下に示す。

| 異同パターン | 上巻 | 下巻 | 合計 |
|----------|----|----|-----|
| A/BCD | 16 | 34 | 50 |
| AB/CD | 26 | 21 | 47 |
| C/ABD | 12 | 1 | 13 |
| B/ACD | 7 | 5 | 12 |
| D/ABC | 1 | 2 | 3 |
| A 闕字 1 字 | 1 | 2 | 3 |
| A/D/BC | 1 | 0 | 1 |
| AD/BC | 0 | 1 | 1 |
| A 闕字 3 字 | 0 | 1 | 1 |
| A 衍字 1 字 | 1 | 0 | 1 |
| 計 | 65 | 67 | 132 |

たとえば、「A/BCD」は「A だけが異なっており、BCD では別の漢字が使われている」パターンをいう。

衍字（えんじ＝余分な字）・闕字（けつじ＝脱字）のパターンは A/BCD のみで出現している。これは A 無刊記本が他本から孤立していることをあらわしている。また、A の闕字および誤字は BCD では修正されており、A が最古の版であることがわかる。

なお、以下の諸版の異同一覧表は、字形の大きく異なる裏と裏などは、別字としてあつかい、リストに含めている。富・富などのいわゆる異体字は、リストに含めていない。むろん後筆の

書き込み、付箋などは除外している。

A 無刊記本にだけ登場している衍字 1 字については最後に論じる。

諸版の異同一覧表・上巻

| 項目 | 活字本 | | | 整版本 | 異同パターン |
|---------|-------|----------|----------|----------|----------|
| | A 無刊記 | B 元和 3 年 | C 寛永 3 年 | D 寛永 9 年 | |
| 姜沆序 | 夭扎 | 夭扎 | 夭札 | 夭札 | AB/CD×2 |
| 上巻目録 | 崔或 | 崔或 | 崔或 | 崔或 | A/BCD |
| 001 伏羲 | 宓犧 | 宓犧 | 慮犧 | 慮犧 | AB/CD |
| 003 黄帝 | 鳥号 | 鳥号 | 鳥号 | 鳥号 | AB/CD |
| 006 鬼臾區 | 鬼臾區 | 鬼臾區 | 鬼臾區 | 鬼臾區 | A/BCD×2 |
| 011 俞附 | 瓜幕 | 瓜幕 | 瓜幕 | 瓜幕 | AB/CD |
| 020 醫緩 | 豎子 | 豎子 | 豎子 | 豎子 | C/ABD |
| 021 醫和 | 無改 | 無攻 | 無攻 | 無攻 | A/BCD |
| 023 秦越人 | 何怪 | 何恠 | 何怪 | 何怪 | B/ACD |
| 023 秦越人 | 重賤 | 重賤 | 重財 | 重財 | AB/CD |
| 023 秦越人 | 不能口藥 | 不能服藥 | 不能服藥 | 不能服藥 | A 闕字 1 字 |
| 024 子儀 | 子義 | 子義 | 子儀 | 子儀 | AB/CD |
| 028 公孫光 | 揚中倩 | 陽中倩 | 陽中倩 | 陽中倩 | A/BCD |
| 028 公孫光 | 揚慶 | 陽慶 | 陽慶 | 陽慶 | A/BCD |

| | | | | | |
|----------|------|------|------|------|----------|
| 030 倉公 | 表裡 | 表裡 | 表裏 | 表裏 | AB/CD |
| 039 玄俗 | 常山 | 常山 | 常出 | 常出 | AB/CD |
| 048 華佗 | 於內 | 族內 | 於內 | 於內 | B/ACD |
| 048 華佗 | 佗 | 佗 | 他 | 他 | AB/CD×4 |
| 048 華佗 | 佗 | 佗 | 他 | 佗 | C/ABD×10 |
| 048 華佗 | 傷動 | 復動 | 復動 | 復動 | A/BCD |
| 048 華佗 | 執不自生 | 熱不自生 | 熱不自生 | 熱不自生 | A/BCD |
| 048 華佗 | 苟彘 | 苟或 | 苟或 | 苟或 | A/BCD |
| 048 華佗 | 腸癰 | 腸癰 | 腸癰 | 腸癰 | AB/CD |
| 050 樊阿 | 巨闕 | 巨闕 | 巨闕 | 臣闕 | D/ABC |
| 058 皇甫謐 | 形疆 | 形疆 | 形疆 | 形疆 | A/BCD |
| 062 史脫 | 大醫 | 大醫 | 太醫 | 太醫 | AB/CD |
| 071 蔡謨 | 尔雅 | 尔雅 | 爾雅 | 爾雅 | AB/CD |
| 082 王纂 | 躬子 | 躬子 | 盼子 | 躬子 | C/ABD |
| 092 崔或 | 崔彘 | 崔或 | 崔或 | 崔或 | A/BCD×2 |
| 093 褚澄 | 而聚 | 而聚 | 而娶 | 而娶 | AB/CD |
| 093 褚澄 | 延 | 涎 | 涎 | 涎 | A/BCD |
| 093 褚澄 | 鷄雛 | 雞雛 | 雞雛 | 雞雛 | A/BCD |
| 095 徐文伯 | 九錫錫命 | 九之錫命 | 九之錫命 | 九錫之命 | A/D/BC |
| 097 徐嗣伯 | 治服 | 治脈 | 治服 | 治服 | B/ACD |
| 103 陶弘景 | 真白先生 | 貞白先生 | 貞白先生 | 貞白先生 | A/BCD |
| 106 馬嗣明 | 若能差之 | 若能差之 | 苦能差之 | 苦能差之 | AB/CD |
| 107 龍樹大士 | 假其訖 | 假其訖 | 假其說 | 假其說 | AB/CD |
| 122 許智藏 | 到當 | 當到 | 到當 | 到當 | B/ACD |
| 130 孫思邈 | 仁者 | 行者 | 行者 | 行者 | A/BCD |
| 130 孫思邈 | 天地之象 | 天之象 | 天之象 | 天之象 | A 衍字 1 字 |
| 133 許嗣宗 | 黃耆 | 黃耆 | 黃耆 | 黃耆 | AB/CD |
| 133 許嗣宗 | 蒸骨病 | 蒸骨病 | 薰骨病 | 薰骨病 | AB/CD |
| 138 蘇敬 | 胡子冢 | 胡子冢 | 胡子家 | 胡子家 | AB/CD |
| 141 秦鳴鶴 | 上攻 | 不攻 | 上攻 | 上攻 | B/ACD |
| 158 王冰 | 天元玉策 | 天元王策 | 天元玉策 | 天元玉策 | B/ACD |
| 160 梁新 | 竹雞 | 竹雞 | 竹鷄 | 竹鷄 | AB/CD |
| 163 石藏用 | 大醫 | 大醫 | 太醫 | 太醫 | AB/CD |
| 163 石藏用 | 末蟻螂 | 末蟻螂 | 末蟻螂 | 末蟻螂 | B/ACD |
| 167 吳延紹 | 大醫令 | 大醫令 | 太醫令 | 太醫令 | AB/CD |
| 167 吳延紹 | 唯中 | 唯中 | 喉中 | 喉中 | AB/CD |

諸版の異同一覧表・下巻

| 項目 | 活字本 | | | 整版本 | 異同 パターン |
|----------|-------|--------|--------|--------|------------|
| | A 無刊記 | B 元和3年 | C 寛永3年 | D 寛永9年 | |
| 下巻目録 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | AB/CD |
| 171 太宗皇帝 | 慨罷 | 既罷 | 既罷 | 既罷 | A/BCD |
| 171 太宗皇帝 | 運周 | 運用 | 運用 | 運用 | A/BCD |
| 171 太宗皇帝 | 欲求清爽 | 欲永清爽 | 欲永清爽 | 欲永清爽 | A/BCD |
| 171 太宗皇帝 | 其□□□ | 其可得乎 | 其可得乎 | 其可得乎 | A 闕字3字 |
| 174 劉翰 | 此征 | 北征 | 北征 | 北征 | A/BCD |
| 175 王懷隱 | 隨太醫令 | 隨太醫令 | 隋太醫令 | 隋太醫令 | AB/CD |
| 175 王懷隱 | 禦製 | 御製 | 御製 | 御製 | A/BCD |
| 175 王懷隱 | 温水主簿 | 温水主簿 | 温水主簿 | 温水主簿 | D/ABC |
| 176 陳昭遇 | 日關 | 日閱 | 日閱 | 日閱 | A/BCD |
| 181 郝翁 | 咽哩 | 咽唾 | 咽唾 | 咽唾 | A/BCD |
| 183 許希 | 常問 | 帝問 | 帝問 | 帝問 | A/BCD |
| 183 許希 | □靈應侯 | 封靈應侯 | 封靈應侯 | 封靈應侯 | A 闕字1字 |
| 204 陳子承 | 聘眊 | 聘眊 | 聘眊 | 聘眊 | A/BCD |
| 208 龐安時 | 心解 | 心解 | 心解 | 必解 | D/ABC |
| 208 龐安時 | 桐城 | 桐城 | 桐城 | 桐城 | A/BCD |
| 209 張擴 | 其妙 | 其言 | 其妙 | 其妙 | B/ACD |
| 209 張擴 | 侯之 | 侯之 | 侯之 | 侯之 | AB/CD |
| 212 楊介 | 生姜 | 生姜 | 生薑 | 生薑 | AB/CD×2 |
| 212 楊介 | 黃著 | 黃著 | 黃耆 | 黃耆 | AB/CD |
| 214 張渙 | 貸藥 | 貸藥 | 貸藥 | 貸藥 | A/BCD |
| 215 劉混康 | 冲和光生 | 冲和先生 | 冲和先生 | 冲和先生 | A/BCD |
| 216 寇宗奭 | 治療失 | 治療及 | 治療失 | 治療失 | B/ACD |
| 221 聶從志 | 減算 | 減算 | 減算 | 減算 | A/BCD |
| 223 張濟 | 酢針 | 酢鹹 | 酢鹹 | 酢鹹 | A/BCD |
| 225 王貺 | 得幸 | 後幸 | 後幸 | 後幸 | A/BCD |
| 227 潘璟 | 溲溲 | 温溲 | 温溲 | 温溲 | A/BCD |
| 233 婁居中 | 薑附 | 薑附 | 姜附 | 姜附 | AB/CD×2 |
| 235 周順 | 桃樟腦 | 排樟腦 | 排樟腦 | 排樟腦 | A/BCD |
| 236 杜任 | 良中 | 郎中 | 郎中 | 郎中 | A/BCD |
| 236 杜任 | 而良也 | 而良已 | 而良已 | 而良已 | A/BCD |
| 237 許叔微 | 知司 | 知可 | 知可 | 知可 | A/BCD |
| 273 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | 耶律敵魯 | AB/CD×3 |

| | | | | | |
|---------|------|------|------|------|----------|
| 279 張元素 | 爲文理 | 無文理 | 無文理 | 無文理 | A/BCD |
| 281 張從政 | 名有 | 各有 | 各有 | 各有 | A/BCD |
| 288 許國禎 | 司作諫官 | 可作諫官 | 可作諫官 | 可作諫官 | A/BCD |
| 289 李杲 | 富厚無事 | 富原無事 | 富原無事 | 富原無事 | A/BCD |
| 289 李杲 | 如鼓 | 如鼓 | 如鼓 | 如鼓 | AB/CD |
| 289 李杲 | 薑附 | 姜附 | 薑附 | 薑附 | B/ACD |
| 292 羅知悌 | 世稱 | 世稱 | 世號 | 世號 | AB/CD |
| 295 周眞 | 產子壯 | 產子狀 | 產子狀 | 產子狀 | A/BCD |
| 300 戴起宗 | 悟眞口 | 悟眞篇 | 悟眞篇 | 悟眞篇 | A 闕字 1 字 |
| 302 許遜 | 極治之 | 極治之 | 拯治之 | 拯治之 | AB/CD |
| 308 滑壽 | 徒儀眞 | 徒儀眞 | 徒儀眞 | 徒儀眞 | AB/CD |
| 309 朱震亨 | 句所習 | 向所習 | 向所習 | 向所習 | A/BCD |
| 309 朱震亨 | 皆無所稟 | 皆無所賣 | 皆無所賣 | 皆無所賣 | A/BCD |
| 310 葛乾孫 | 坊論 | 防論 | 防論 | 坊論 | AD/BC |
| 310 葛乾孫 | 九所稱譽 | 凡所稱譽 | 凡所稱譽 | 凡所稱譽 | A/BCD |
| 310 葛乾孫 | 而令 | 勿令 | 勿令 | 勿令 | A/BCD |
| 311 呂復 | 如常 | 如以 | 如常 | 如常 | B/ACD |
| 330 孫景祥 | 因恠 | 因恠 | 因怪 | 因怪 | AB/CD |
| 332 盛文紀 | 裹麪食也 | 裹麪食也 | 裹麪食也 | 裹麪食也 | A/BCD |
| 333 劉宗序 | 煨乾姜 | 煨乾姜 | 煨乾薑 | 煨乾薑 | AB/CD |
| 334 王時勉 | 常勳 | 常熟 | 常熟 | 常熟 | A/BCD |
| 334 王時勉 | 參著 | 參著 | 參莖 | 參莖 | AB/CD |
| 334 王時勉 | 百裹 | 百裹 | 百裹 | 百裹 | A/BCD |
| 337 吳傑 | 腸谷 | 腸谷 | 腸谷 | 腸谷 | A/BCD |
| 340 倪維德 | 少兒 | 少兒 | 小兒 | 小兒 | AB/CD |
| 347 張頤 | 信然 | 信哉 | 信哉 | 信哉 | A/BCD |
| 347 張頤 | 養生 | 養正 | 養正 | 養正 | A/BCD |
| 350 黃師文 | 其夫 | 其失 | 其夫 | 其夫 | B/ACD |
| 354 沈以潛 | 爲御醫 | 爲御醫 | 以御醫 | 爲御醫 | C/ABD |
| 370 汪機 | 醫之傳 | 醫之博 | 醫之博 | 醫之博 | A/BCD |

A 無刊記本の衍字 1 字は、「孫思邈」の条にある。

照鄰曰，人事奈何。曰，心爲之君，君尚恭，故欲小。詩曰，如臨深淵，如履薄冰。小之謂也。膽爲之將，以果決爲務，故欲大。詩曰，赳赳武夫，公侯干城。大之謂也。仁

(BCD 行)者静，地之象，故欲方。傳曰，不爲利回，不爲義疚。方之謂也。智者動，天地 (BCD 天) 之象，故欲圓。易曰，見機而作，不俟終日。圓之謂也。

この一節は、「地」の字以外は、『旧唐書』の文章をそのまま引き写したもの。

『旧唐書』孫思邈伝の一節の現代中国語（繁体字）表記を次に示す。

照隣曰：“人事奈何？”曰：“心爲之君，君尚恭，故欲小。《詩》曰：‘如臨深淵，如履薄冰。’小之謂也；膽爲之將，以果決爲務，故欲大。《詩》曰‘赳赳武夫，公侯幹城。’大之謂也；**仁**者靜，地之象，故欲方。《傳》曰：‘不爲利回，不爲義疚。’方之謂也；智者動，**天**之象，故欲圓。《易》曰‘見機而作，不俟終日。’圓之謂也。”

ここには次のような二重の対句構造がある。

照隣が曰く，人事いかん。

曰く，

[第一の対句]

(1) 心，之を君と為り，君は恭を尚（たつと）ぶ。故に小ならんことを欲す。

詩（詩経・小雅）に曰く，「深淵に臨むが如く，薄氷を履むが如く」と。

小の謂なり。

(2) 胆，之を將と為す。果決（かけつ決断）を以て務と為す。故に大なることを欲す。

詩（詩経・国風・周南）に曰く，「赳赳たる武夫，公侯の干城（かんじょう＝楯と城，転じて軍人）」と。

大の謂なり。

[第二の対句]

(1) **仁**は静なり。地の象，故に方たらんことを欲す。

伝（春秋左氏伝・昭公三十一年）に曰く，「利回（利のために邪）を為さず，義疚（義のためにやましいこと）を為さず」と。

方の謂なり。

(2) 智は動ず。**天地**の象，故に円なることを欲す。

易（易経・繫辞下）に曰く，「機を見て作す。終日を俟（ま）たず」と。

円の謂なり。

第一の対句では，(1) 心＝君＝尚恭＝小に対し，(2) 胆＝將＝果決＝大が対応している。

第二の対句において，(1) は仁＝静＝地＝方，(2) は智＝動＝天地＝円となっていることを見比べれば，(2) の「天地」は「天」の誤りであることは明らかであろう。

この「地」が意図的に書き加えられた衍字（えんじ＝余分な字）と考えられる理由は，おそらく慎重のうえに慎重に校正され，活字が組まれた，『歴代名医伝略』の本文5万字のうち，衍字はこの「地」だけだからである。

また，諸版の異同表にみられるように，異同のほとんどは鳥と烏，佗と他，或と或，光と先，司と可など，字形のよく似た漢字どうしの書換えであり，意味のある異同は，このA無刊記本の衍字「地」しかない。

しかもこの文は、『排耶蘇』で「耶蘇者」が述べている「天は円なり．地もまた円なり」と合致しており，当時として意味のある，根拠のある言明となっている．

B 元和 3 年本，C 寛永 3 年本，D 寛永 9 年本の 3 本は禁教後に出版されている．A 無刊記本にあらわれる闕字・誤字は，BCD では訂正されており，A こそが 4 本のうちの最古の出版であると考えられる．すなわち A 無刊記本は，姜沆序の慶長 3 年から B の元和 3 年までの間，おそらくは慶長の弛教期に出版されたのであろう，西洋伝来の地球（地円）説をさりげなく敷衍して．

吉田宗恂は『歴代名医伝略』の自序で，儒教と道教に対して，「それ性理を明むるは儒学にて，寿命を保んずるは道教なり．これを兼ね有するは医ならくのみなり．豈大道にあらずと謂わんや」とし，さらに，「班固が方技を医経・経方・神仙・房中の 4 種にわけているが，房中は神仙の一つ」と，ユーモアさえ感じさせる，余裕ある態度を示している．

角倉素庵の叔父であり，吉田光由の外伯父であり，家康の侍医であり，当代一流の文化人であり，どの日本人よりもイエズス会士・ジョアン・ロドリゲスに近い位置にいたと考えられる，吉田宗恂は，「天の象，故に円なることを欲す」とすべきところを，諧謔をこめて「天地の象，故に円なることを欲す」と記したのではないだろうか．●